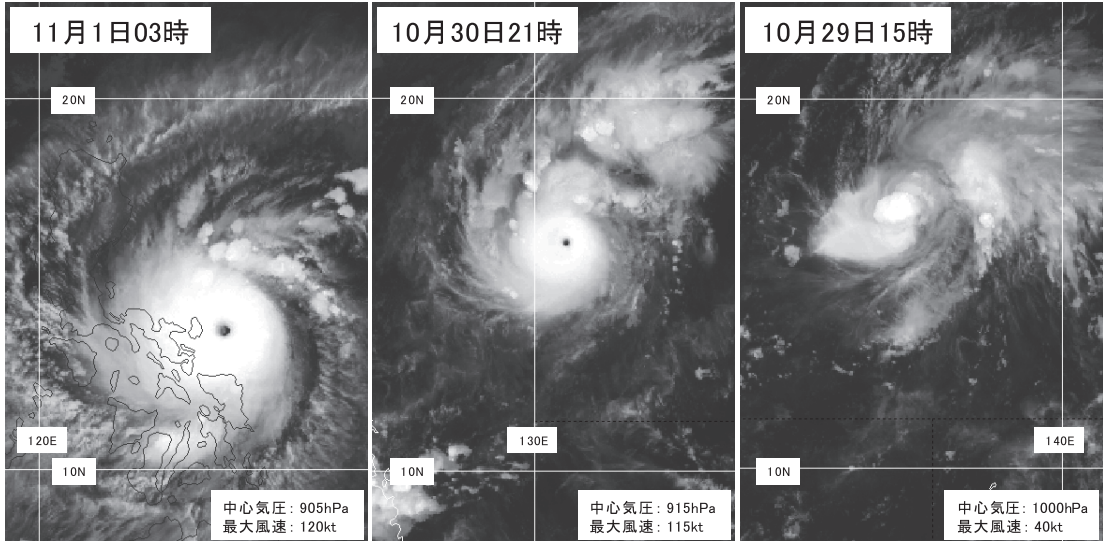




今月のひまわり画像—2020年10月

フィリピン上陸前に急発達したコンパクトな台風第19号



第1図 2020年10月29日15時～11月1日03時（日本時間）の30時間毎の台風第19号の赤外画像。

2020年10月中旬～11月中旬の約1か月間、フィリピンの東付近から南シナ海にかけての海域では、8個の台風（第15号～第22号）が連続的に発生・発達し、西進した（以下、台風についての記録は速報値）。中でもコンパクトだった第19号はフィリピンに上陸する前に急発達をとげ、2013年に同国に甚大な被害をもたらした第30号（Haiyan）を彷彿させた。

第19号は29日03時に同海域で発生してから11月6日03時に南シナ海で熱帯低気圧に弱まるまで、亜熱帯高気圧の南側を比較的速い速度で西寄りに進んだ。第1図は10月29日15時～11月1日03時（日本時間）の30時間毎のフィリピンの東付近における台風第19号の赤外画像である。発生直後の29日15時頃から周辺のCbクラスターは急速に台風の中心付近に集中し、曲率を持ったバンド状を呈し始めた（第1図）。同日夜から中心付近の雲域の円形度がよくなり、眼を確認できるようになった。また、上層における高気圧性曲率の吹き出しも次第に顕在化した。30日には、中心付近の雲域はさらに円形度を増しながら拡大すると共に、ピンで突き刺したような眼が明瞭化し、同日21時には最大風速115kt（1kt≒0.51m/s）、中心気圧915hPaと解析さ

れた。この時、いかに急発達したかは、中心気圧が同時刻までの6時間に30hPa、12時間に50hPa、24時間に75hPa低下したことから伺える。その後も第19号は顕著なトロコイダル運動を示しながら西南西に進み、フィリピンに上陸する約6時間前の1日03時には最大風速120kt、中心気圧905hPaにまで発達した。第19号は発生当初よりスケールの小さな台風であり、同時刻の暴風域を示す円の半径も90kmとかなり小さかった。台風ベストトラック（風データ統計：1977年～）によると、台風が最大風速120kt以上に発達している期間の暴風半径としては、最も小さい値となった。

台風第19号が今年一番の発達（11月末現在）を示した原因としては、海面水温が約30℃以上と高い、そして風の鉛直シアが比較的小さい海域を進んだことその他に、北側を通過した中緯度のトラフ、東側に接近していた第20号の暖湿気も関与していたと考えられる（図略）。さらに、第19号はコンパクトであったがゆえに、地形の影響を大きく受けずに、フィリピンのカタンドゥアネス島の東約60kmの位置で最盛期を迎えたと推察される。

（気象庁大気海洋部予報課 木下 仁）